福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1435集

麦野Ｃ遺跡 10

― 第 17 次調査 ―

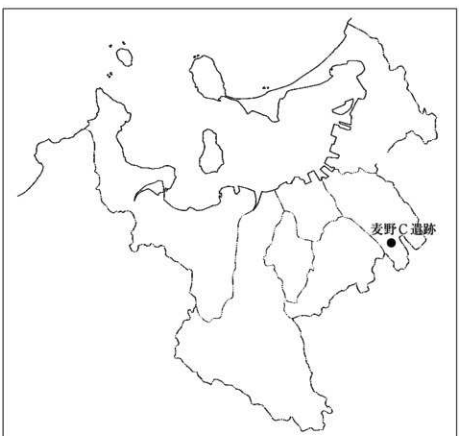
２０２１

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1435集

麦野C遺跡 10

— 第 17 次調査 —



調査番号 1941
遺跡略号 MGC-17

2021

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う麦野C遺跡第17次調査について報告するものです。調査では掘立柱建物などが出土し、弥生時代から近世の集落の一端を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、株式会社スエナガ様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長　星子明夫

例　言

1 本書は共同住宅建設にともない実施した麦野C遺跡第17次調査の報告書である。
2 本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3 検出遺構には検出順に3桁の連番号を与え、性格を示す記号として、SC（竪穴建物）、SK（土抗）、SE（井戸）、SP（ピット）を頭に付した。
4 掲載した遺物の番号は、調査ごとの通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
5 本書に掲載した遺構・遺物の実測図は池田祐司が作成した。
6 本書に掲載した挿図の製図は池田が行った。
7 本書に掲載した写真は池田が撮影した
8 本書の編集・執筆は池田が行った。
9 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　調査組織…… 1
Ⅱ　立地と周辺の調査…… 1
Ⅲ　調査の記録…… 4
　1　調査の概要…… 4
　2　溝…… 4
　3　土坑…… 8
　4　井戸…… 12
　5　掘立柱建物…… 17
　6　ピット出土および表採遺物…… 18
　7　おわりに…… 18

遺跡名	麦野C遺跡	調査次数	17 次	調査略号	MGC-17
調査番号	1941	分布地図図幅名	13　雑餉隈	遺跡登録番号	50
申請地面積	322.37㎡	調査対象面積	170.66㎡	調査面積	193㎡
調査期間	2019年9月18日～2019年10月21日			事前番号	2019-2-318
調査地	福岡市博多区麦野6丁目15－14・15・16・18				

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、博多区麦野６丁目15-14・15・16・18における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和元（2019）年６月21日付けで受理した（2019-２-318）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野Ｃ遺跡の範囲であり、令和元年７月９日に確認調査を実施し地表下30cmで遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課は申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、予定建築物の構造および造成計画上、工事による遺構への影響が避けられないため、令和元年に発掘調査、同２年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで合意し委託契約を締結した。申請地322.37㎡のうち調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響がある170.66㎡である。

発掘調査は令和元（2019）年９月18日から10月21日に実施した（調査番号1941）。調査面積は193㎡で、遺物はコンテナ２箱分が出土した。敷地南側の一部は未調査である。

2　調査組織

調査委託　株式会社スエナガ
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財活用部埋蔵文化財課　　課長　菅波正人
　　調査第１係長　吉武学
庶務担当　文化財活用部文化財活用課　　松原加奈枝
事前審査　文化財活用部埋蔵文化財課　　田上勇一郎　朝岡俊也　山本晃平

調査担当　文化財活用部埋蔵文化財課　　池田祐司

Ⅱ　立地と周辺の調査

麦野Ｃ遺跡は福岡平野南部の丘陵上に位置し、東を大野城市、西を春日市に挟まれた市域の最南部にあたる。立地する台地は阿蘇４火砕流の堆積で、浸食により狭い谷が入り八手状に分かれる。この谷によって遮られた地形的なまとまりごとに、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡、麦野Ａ遺跡、麦野Ｂ遺跡、麦野Ｃ遺跡と呼称している。

これらの遺跡では旧石器時代から遺物がみられ、弥生時代では前期、中期末から後期の遺構が確認されている。古墳時代には遺構は希薄になるが、８世紀になると各地点で住居跡が確認され丘陵の広い範囲に集落が広がる。それ以降も遺構は確認できるが薄い。８世紀の遺構の密度の濃さが突出し、大宰府との関わりが指摘されている。周辺の遺跡、調査の詳細ついてはこれまでの報告（643、1376集など）を参照されたい。

本調査地点は麦野Ｃ遺跡が広がる丘陵の西側縁辺部に位置し、麦野Ａ遺跡との間に北側から入る谷に面している（図２、４）。麦野Ｃ遺跡の丘陵頂部は図４では標高19ｍほどで、標高16ｍの調査地点とは３ｍの比高差があり、西側の谷へ落ちる。各年代の空中写真を見ると、この谷は昭和50年代まで

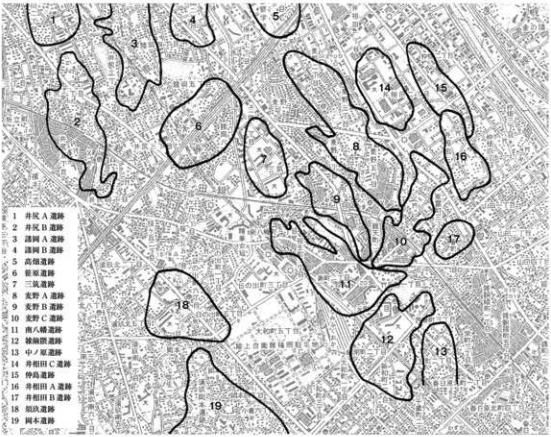


図1　遺跡位置図（1/25000）国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

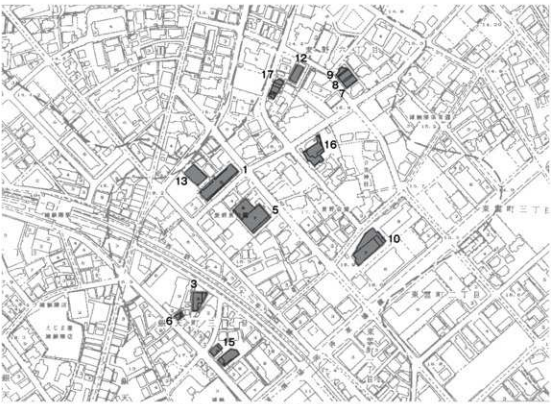


図2　調査地点位置図（1/4000）

田として利用されている。調査地点は、昭和初年頃の図（図４）では竹林であり、昭和31年までには谷との間の道が広がり、昭和50年に宅地化されている。

近隣の調査では、1・5・13次調査で８世紀の住居跡94棟以上が確認され、この時期の遺構が密集している。7・8・9次調査では８世紀の住居跡２棟、掘立柱建物１棟がみられる。弥生時代では５次調査で前期末の竪穴建物１棟と小型棺１基、後期初頭の竪穴建物６棟以上と掘立柱建物２棟など、16次調査で中期末から後期の住居跡２棟、北東に接する12次調査では弥生時代の貯蔵穴と近世の遺構が出土している。８世紀の遺構は丘陵中央の標高が高い部分に集中がみられる。また、後世の削平が遺構の密度、残り具合に大きく影響していると考えられる。

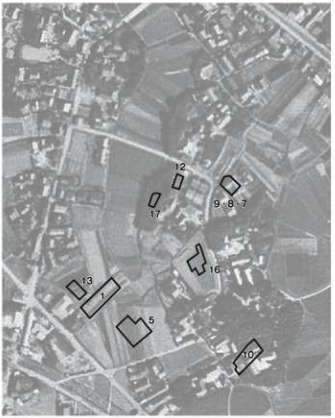


図３　調査地点周辺空中写真（昭和23年）
国土地理院ウェブサイトデータを加工して作成

図４　調査地点位置図（昭和初期）

Ⅲ　調査の記録

1　調査の概要

対象地西側は道路に面しほぼ同レベルで、東側がやや高く比高差は40cmほどである。北、東、南側はブロック塀を挟んで隣地に接し、東側は4、50cmほど高い。調査開始時は建物解体後の更地であった。調査は廃土を場内処理する必要から対象地を南北に区切って反転し、北側から調査を行った。

遺構面は攪乱土壌を20～40cmほど除去した鳥栖ローム上面で、北西へ向かって緩やかに下がり、標高は15.4～14.8ｍである。検出した遺構は溝２条、井戸３基、土坑３基、掘立柱建物１棟、ピットである。遺構埋土は主に黒褐色土、または暗灰褐色土（ピット）で前者の遺構が古い傾向がある。近世のものは灰茶褐色土を埋土とする。２条の溝は近現代で北西へ走る。土坑のうち黒褐色土を覆土とするSK024、033、掘立柱建物からは少量ながら弥生土器、土師器が出土し、弥生時代、古代の可能性がある。３基の井戸は近世のものと考えられる。

遺物は古代以前と考えられる黒褐色土を覆土とする遺構からは、出土するが少ない。近世の井戸からは肥前陶器･磁器、漆器椀、石臼などが出土している。弥生時代中期から江戸期の集落の一部である。

2　溝

調査区北側を東西に横断する２本の溝SD001．002がほぼ並行し、南側にやや弧を描くように走る。埋土は淡灰茶褐色土で締まりがなく、SD002はやや砂質が強い。幅、深さはSD001の方が広く深い。

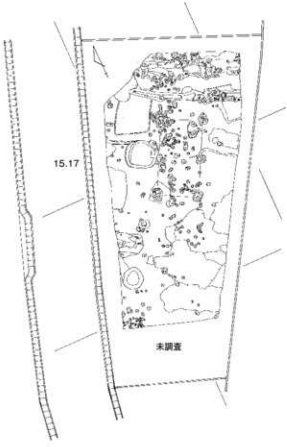


図５　調査区位置図（1/300）

SD001（図７・８）　幅110から150cmで、深いところで40cmほどが残る。底の幅は40から90cmと場所によって異なるが、おおむね断面逆台形を呈す。底は延長7.8ｍで20cmほどの比高差がある。床、斜面にはピットが多くみられる。これらのピットに遺物は少ないが、暗灰褐色土の埋土は南側のピットと同様である。遺物は少量出土した。主に近現代のものである。遺構の時期は２の猪口から昭和12年以降となる。

出土遺物　１は印判の蓋でわずかに青い釉をかけ、接合部は露胎である。上面に鳳凰、菱形文、草花文などを全面に描く。内面中央に文字状のスタンプを押す。外径16cmを測る。２は磁器の猪口で1/2強を欠く。口縁部内外は淡い青で縁取り、体部内面には金文字で右から左に２段で「支那事変凱旋記念」と印字がある。見込みは桜花形の外枠内に天津、北京、大同、太原、南京等の地名が鉄道路状の線で結ばれ、着帽の人、中央には日の丸らしき絵があり、見込

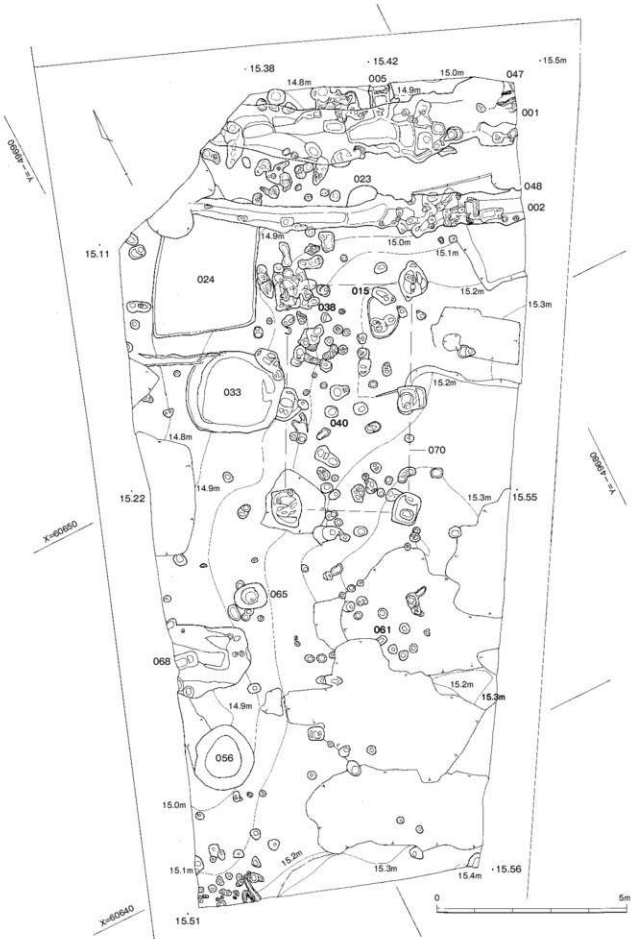


図6　遺構配置図 (1/100)

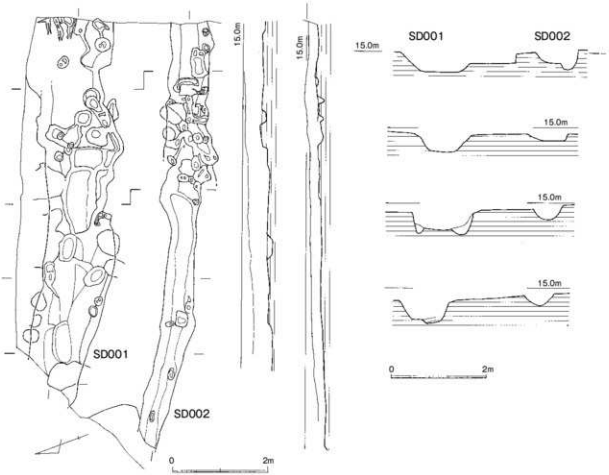


図7　SD001、SD002実測図（1/80）

み全体を薄く黄色で塗る。3は染付の皿で内側面にアーチ状の橋を描く。4は青磁の碗で灰緑色の釉を内外面に施す。畳付から内を削り薄く仕上げる。5は陶器で内面の緑色釉を輪状に釉剥ぎし、外面はわずかに緑がかった透明釉を施す。畳付からは露胎で胎土は灰白色で緻密である。6、7は陶器のすり鉢である。6は浅く細いすり目に重ねてやや太く深いすり目を刻む。外面に薄い褐釉をかけ、内面は一部に垂れる。胎土に砂粒を含み焼きは固い。7は外面に薄い灰茶褐色土の釉がかかり、胎土に4．5㎜大までの砂粒を含む。すり目は幅広で摩滅する。8は瓦質の口縁部で大型の鉢と考えられる。器壁は灰褐色で胎土に砂粒を含む。他に陶器の甕、壺、磁器の壺などが少量ある。

SD002（図7・8）　幅55から80㎝で、深さ20から30㎝ほどが残る。床の幅は15から30㎝と狭い。確認した延長9ｍの比高差は22㎝ほどである。SD001に比べて幅、深さの規模は小さいが、傾斜は同じである。床、斜面には溝に切られるピットがみられる。出土遺物はわずかである。SD001との先後関係はわからないが、近い時期であろう。

出土遺物　9は陶器で鉢の底部付近か。内外面に灰緑色釉を施す。内面には目跡が6ヵ所見られる。底は露胎で回転削り痕が残る。10は陶器で仏飯器状の脚部と思われる。淡い黄橙色の釉で、底は露胎で回転調整痕が残る。胎土は黄白色できめ細かい。11は陶器の片口の内外面に淡灰色の釉に細かな貫入が密に入る。12は瓦質の製品で表裏面に刷毛目を施し、縁はなでる。焼成前に施した径1.7㎝の孔がある。

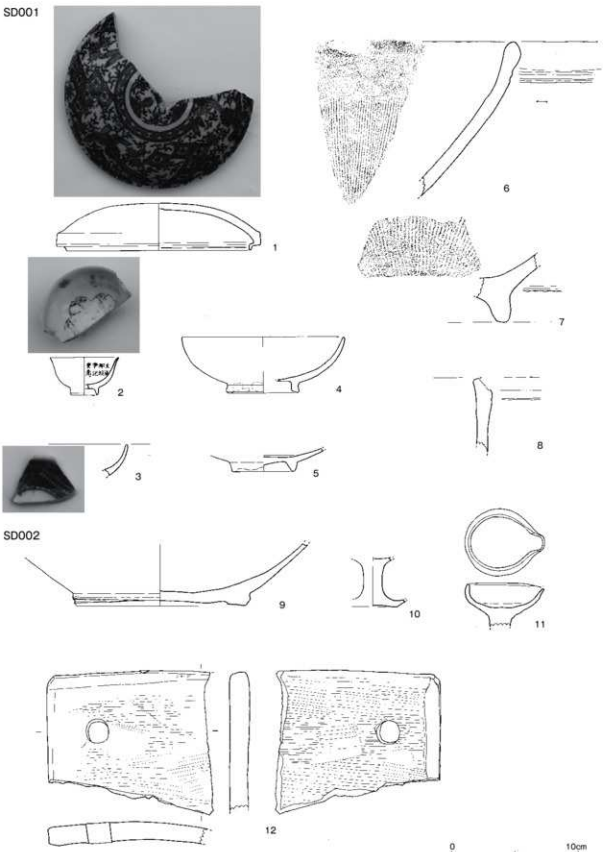


図８　SD001、SD002出土遺物実測図 (1/3)

3　土坑

SK024（図９・11）　不整方形の竪穴で北側がSD002に切られる。平面267×330㎝以上の規模で深さ17㎝ほどが残る。埋土は暗褐色から黒褐色のしまりのない土壌で下部は黄色小ブロックを含む。床は中央がやや高く、周囲は２～５㎝ほど低く、特に西側は10㎝ほど低い。竪穴建物の可能性もあるが柱穴は見られない。床は黄褐色ロームに暗褐色土が混じり貼床状をなし、厚さ１～12㎝ほどである。これを除去した床面は、北、西が低く、比高差は南北で７㎝、東西で15㎝ほどである。遺物は埋土から出土があったが少ない。新しいものをとると、古代か。

出土遺物　13、14は土師器の甕の口縁部と頸部で同一個体の可能性もある。13は口縁部内面に横方向の刷毛目が見られ、胴部は外面縦方向の刷毛目、内面横方向の削りである。14は外面刷毛目調整で炭化物が付着する。内面は横から斜め方向の削りである。奈良時代のものか。15は厚手の外反する甕の口縁部の小片で、内面に横なで調整痕が残る。３㎜大までの砂粒を含み、器面は淡橙色を呈す。13と同一個体の可能性がある。16は鋤先口縁の甕で、平坦部は短く中期前半に位置付けられる。器面は荒れる。17は椀形鉢の口縁部で器面は荒れる。淡橙色を呈し外面はさらに淡い。18は甕の底部で外面は丁寧ななで、内面指おさえで、器面は赤茶色を呈す。４㎜大までの砂粒を多く含む。底に種子状の圧痕がみられる。1/3からの復元。弥生中期前半か。このほかに内面削りとなで調整の小片が計40数点ある。

SK033（図９・11）SK024に近接して検出した隅丸方形または不正円形の土坑で、平面250×220㎝で、深さ40㎝ほどが残る。北側を新しい溝に切られる。埋土はしまりのない黒褐色土で、筋状の黄褐色土をわずかに含む。黒褐色土を除去した５層上面は、細かな凹凸が著しい。５層は黄褐色土を主としブロック状の黒褐色土が混じる。５層を除去したローム層の面では、北側が若干低いが大きな差はない。５層上面と４層以上の埋土は写真８のように明瞭な差があり、一時期の床であったと思われる。遺物はSK024より若干少ないが、内面削りの破片はない。遺物は弥生期に収まる。

出土遺物　19は鋤先口縁の壺で器面は荒れて調整不明確で、黄橙色を呈す。外面と口縁部上部に赤色顔料の痕跡が残る。内面には小動物によると考えられる傷がみられる。弥生中期後半。20は土製投弾で片側を欠く。器面は暗灰褐色で砂粒を含むが胎土は細かい。他に器台の破片や小片が出土している。

SK048（図11・13）　調査区北東端部でローム面と考えていた箇所を念のために掘り下げた際に、東壁断面に土坑状の掘り込みを確認した。断面に見える規模は南北に210㎝ほどで、のちに写真等からみて調査区内に１ｍ弱はプランがあったと考えられる。平面形は不明である。深さは130㎝ほどで床は一定せず、北側が低い。埋土下層の７層は分層もできようが、おおむね暗灰褐色粘質土で、上層の茶褐色、暗褐色、黄白色のブロック状の堆積とは異にする。７層のレベルで湧水がある。他の遺構の埋土との類似から近世の可能性を考えておきたい。遺物は７層断面から次の２点を採集したのみである。近世か。

出土遺物　21は土師皿の小片で底に糸切り痕が残る。径10㎝前後の小皿である。22は瓦質の鉢の底部付近で傾きは不明確である。内面は横方向の刷毛目状で木目幅が広い。外面は目が細かな縦方向の刷毛目である。灰色を呈し、細砂粒を多く含む。

SK065（図10・11）略楕円形の土坑で平面86×65㎝、深さ22㎝を測る。中央に瓦質の大型の鉢を据え、東側には甕に沿って段を設ける。埋土はしまりのない灰褐色土である。甕は正置され、底に土師皿１枚が正置されていた。近世。

出土遺物　23は大型の鉢の底部から胴部下部で底部径30㎝を測る。胴部外面は器壁が剥離する。内面は横からわずかに斜め方向の刷毛目調整で、下端に指圧痕がみられる。底はなで調整である。器面

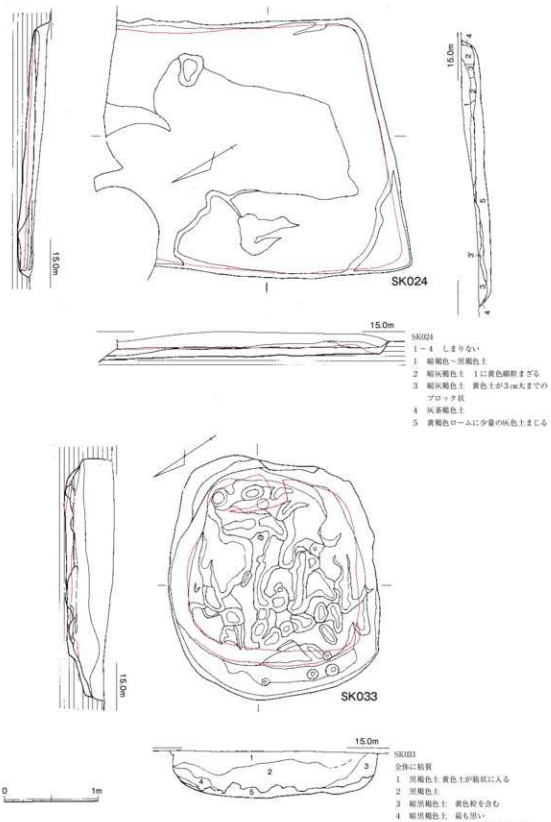


図9　SK024、SK033実測図（1/40）

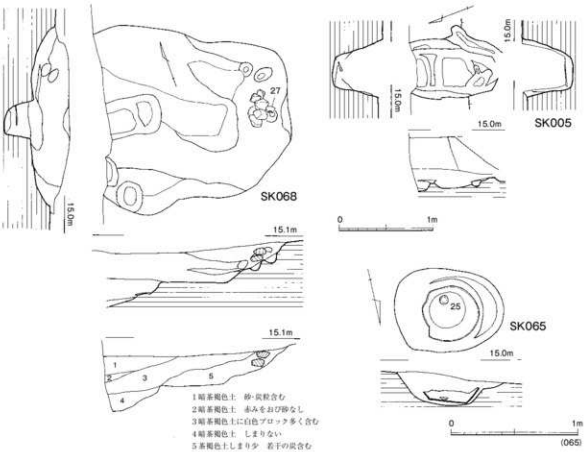


図10　SK005、068、065実測図（1/40・1/30）

は灰褐色で砂粒を多く含む。内面には黄茶色の薄い付着物がみられる。24は口縁部で23と同一個体と考えられる。色調、器面調整は同様である。25は23の底にあった土師皿で糸切り底、回転なで調整で胎土は細かいが少量の3㎜大砂粒、赤色粒を含む。口径は7.25から7.5㎝である。26は染付の皿で外面に唐草文、内面は大柄な花文を描く。1/9から反転した。

SK068（図10・11）不整楕円形のくぼみ状の土坑で西側は調査区外へ延びる。南北長200㎝、東西長200㎝以上を測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかだが歩くと滑る。東端には15㎝大の礫が集まり磁器碗片27が出土した。床面の西側に幅40㎝ほどのピット状の掘り込みがある。埋土は茶褐色土と黄白色ブロックを多く含む暗茶褐色土などで東側から堆積する。遺物は少ない。遺物からは18世紀と考えられる。

出土遺物　27、29は磁器碗。27は青みをおびた透明釉で青緑色で竹文を描く。口縁部1/3からの復元である。29は薄い青色の地は全体に細かな黒い汚れが目立つ。紺で花文を施す。1/4強からの復元である。他に類似した磁器碗2点がある。28は陶器の燈明皿で皿部内外、受部内側には褐釉を施す。口縁部は熱で釉が溶け、白色に膨れる。受部外面は茶褐色の露胎で跳ねた褐釉が付着する。30は糸切り底の土師皿で胎土に細砂粒を多く含む。31は瓦質の火舎で外面に菊花文を押す。器面は横方向のなでである。32は陶器のすり鉢で薄く褐釉を施し、底端部は釉剥ぎする。内面のすり目は摩耗する。

SK005　北壁中央付近で検出した長方形のピット状でSD001に切られる。幅60㎝、長さ90㎝以上で深さ52㎝である。覆土は灰茶褐色土に黄色粒が混じり、下部に多い。遺物の出土はない。SB070の柱穴とは埋土が異なる。

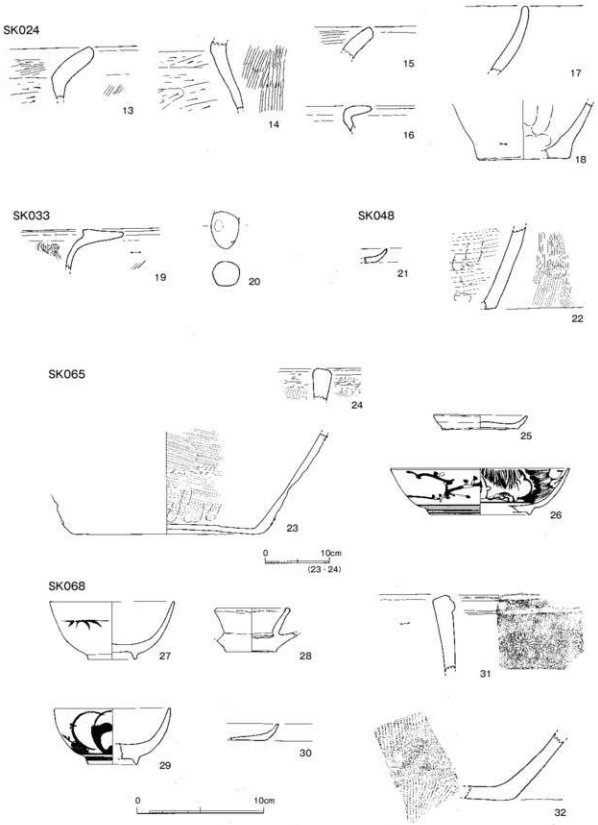


図11　土坑出土遺物実測図（1/3・1/6）

4 井戸

SE023（図12） 調査区北側中央でSD002に切られる。平面形は丸みをおびた長方形で105×78cmを測り、深さ1m95cmを測る。掘方の上部はほぼ直に立ち、上端から70cmほどの標高14.2m付近から湧水し、壁もえぐれる。底は70×50cmほどの平坦面がある。埋土は上部は暗褐色土を主とし、色調や白色ブロック・粒の入り具合で分かれる。下部は水気が強い暗褐色粘質土である。井戸枠やその痕跡は確認できなかった。素掘りの井戸であろうか。遺物は少ない。時期は近世である。

出土遺物 33、34は中位より下の出土である。33は土師質の土鍋で外面なでで指おさえ痕があり炭化物が付着する。内面は細かな横方向の刷毛目調整で端部を面取る。34は瓦質の火舎で外面に突帯を付し、内面には細かく深い横方向の刷毛目が見られる。胎土は細かい。35から40は上半からの出土である。35は須恵器の口縁部で古代の坏か。36は陶器の口縁部で内外面に褐釉を施す。37は陶器の皿で口縁部が屈曲しわずかに内湾して縁を上げる。内外面に灰白色釉を施す。38は陶器の皿で淡い灰釉を施し、目跡がみられる。39は土師器の鉢で、外面は荒れ、内面は横方向の刷毛目が見られる。淡橙色を呈す。40は土鍋の底で外面なでと指おさえで炭化物が付着する。内面は荒れてわずかに横刷毛が残る。他に土鍋等の破片がある。

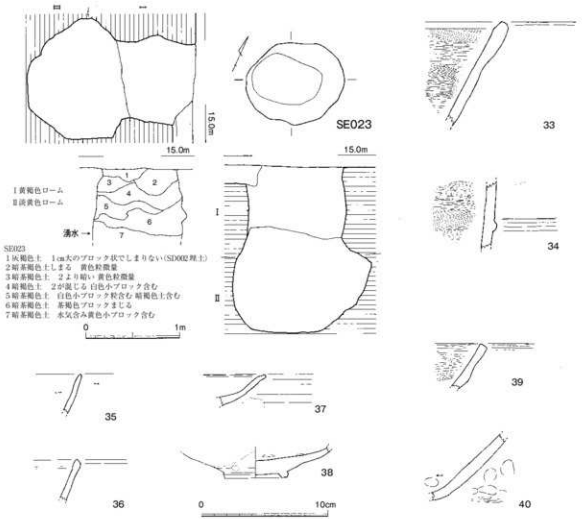


図12　SE023、SE023出土遺物実測図（1/40、1/3）

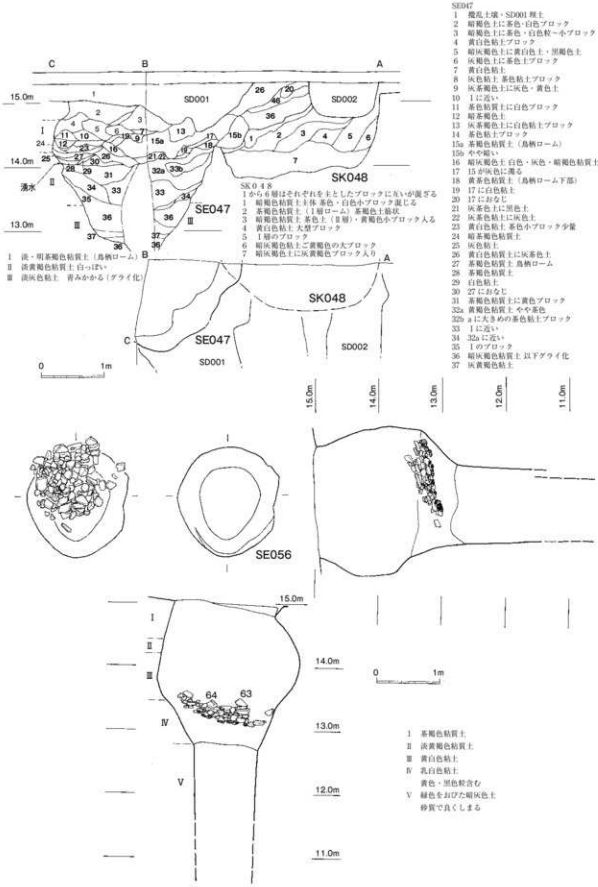


図13　SE047、SK048、SE056実測図（1/60）

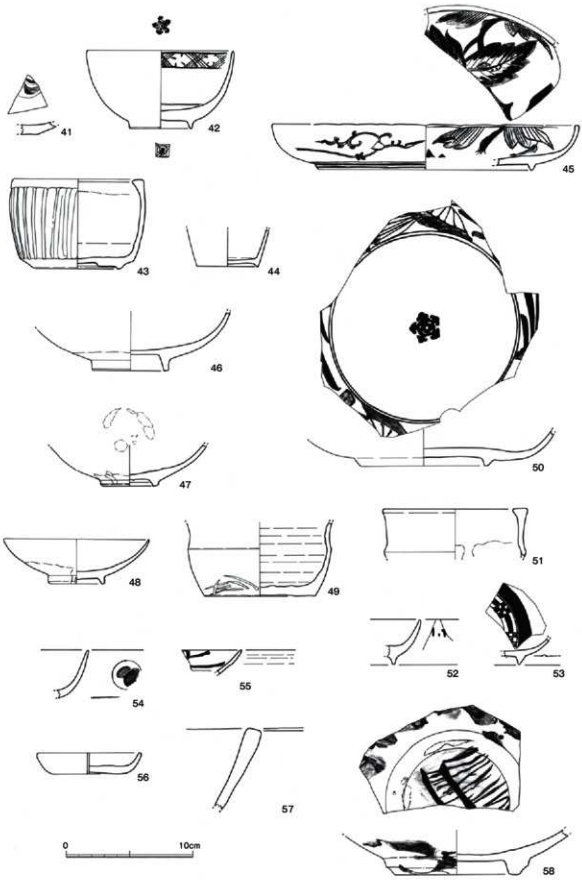


図14　SE056出土遺物実測図1（1/3）

SE047（図13）　調査区北東隅に位置し、当初は貯蔵穴状の遺構と認識していた。重機による掘削時に更に深いことが分かった。遺構プランのうち調査区内は1/4以下と狭いこともあり重機で地表下2.2 mまで掘削したが、調査区端の外に延び、底は調査区外になることを確認した。深さと湧水から井戸とした。確認した上端の平面プランは略円形の一部で半径140cm以上と想定される。埋土は上部の標高14.2 mまでは茶褐色のロームと黄白色粘土がブロック状に入り、それ以下は茶褐色と淡黄色のロームで一度に埋まった感がある。13.4 m以下は暗灰色で炭粒を含む。14.2 m付近から湧水する。土層から井戸枠は確認できない。またSK048を切りSD001に切られる。遺物は確認できなかった。近世か。

SE056（図13～15）　調査区南西側で検出した。平面略円形の上端で170×160cmを測る。壁面は地表下1 mの標高14.0 mまで抉れて広がり、13.0 mですぼまり、以下はそのまま直に立つ。標高14.0 m付近で240×225cm、13.0 mで114×95cmの規模である。標高13.0～13.6 mでは10～20cm大の礫が広がり、南が高く北へ低くなる。埋土は上部は暗灰褐色でしまりがなく、砂、炭粒を含む土で、次第に黄褐色、暗褐色、灰褐色土のブロック状となり、湧水する14.2 m付近以下は暗褐色の水気が多い土壌となる。13.0 m以下は壁が緑色をおびた固くしまった砂質シルトとなり、埋土は暗褐色土と崩落した黄色ロームの大ブロックで、壁からはがれるように掘れる。手堀で地表下4.4 m、標高10.6 mまで掘削したが底に達せず、雨のあとに崩落埋没したため掘削をやめた。後に重機で掘削したが、同じ深さまでしか届かなかった。井戸枠は確認できなかった。遺物は比較的多い。以下礫の広がりの上下で分けて示す。

出土遺物　41から49は下半の出土。41は龍泉窯系の青磁皿Ⅰ類の小片で、数少ない中世の陶磁器

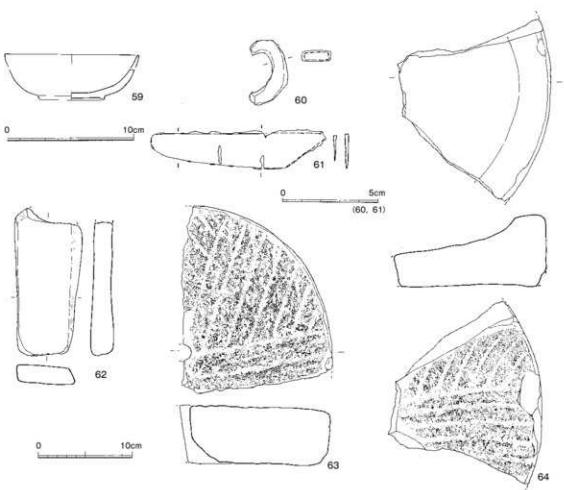


図15　SE056出土遺物実測図2（1/3、1/2、1/4）

である。42は染付の丸形碗で見込みにコンニャク判で五弁花文、口縁部内面に四方襷文帯、畳付内に渦福字銘を施す。43は青磁の香炉で内面は口縁部以外露胎で、畳付内を蛇の目状に釉剥ぎする。体部は直線的だが連弁状に彫る。1/2弱からの反転。44は白磁の猪口で器壁が薄い。45は口縁部輪花の磁器皿で畳付は露胎である。内面に草木、外面に唐草文を染め付ける。1/8の破片。46から49は陶器である。46は白化粧の刷毛目装飾の鉢で見込みは蛇の目に釉剥ぎを施す。47は灰緑色の釉で見込み、畳付きに粘土目が付着する。48は灰緑色の釉で見込みは蛇の目釉剥ぎである。49は胴部中位で屈曲し、内湾する。外面は茶白色、内面は透明釉を薄く施す。底は露胎でへらなで状痕がみられる。1/4からの復元である。50から58は上半の出土である。50は磁器の大皿で、青みをおびた釉で見込みを輪状釉剥ぎ、畳付は露胎である。見込みにコンニャク印判で五弁花文、内外面に草文を染め付ける。51は青磁香炉で内面口縁より下は露胎である。1/3の破片からの復元。52は小碗で畳付のみ露胎である。外面に連続する「ハ」状の文様を施す。53から55は陶器である。53は見込みの文様帯に市松状を描く。54は小碗で、灰茶色を呈し茶色で円に葉文を描く。55は皿状で緑灰色釉で口唇部は一部剥げる。内面に茶色で意匠がみられる。56は糸切り底の土師器の燈明皿で口縁部の割れた部分を中心にタール状の付着

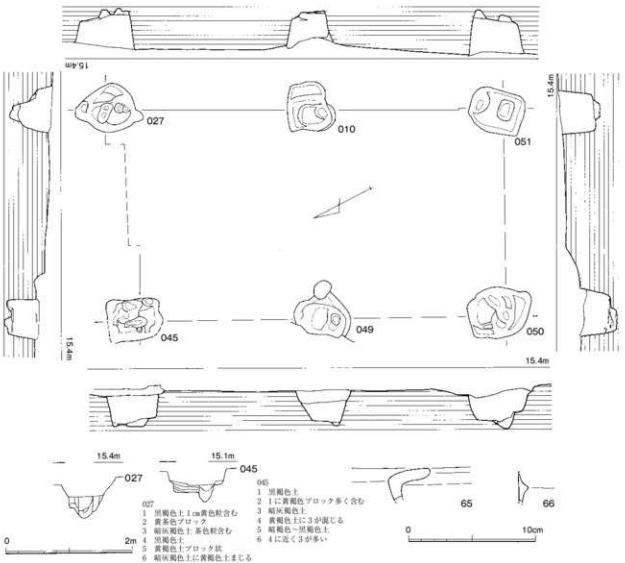


図16　SB070、SB070出土遺物実測図（1/60、1/3）

物が残る。胎土に細砂粒、金雲母が目立つ。57は瓦質の鉢で器面は内外面とも荒れる。58は礫群中から出土した。褐釉陶器で内面は白土による装飾を施し、輪状釉剥ぎである。若干の胎土目が見られる。外面一部に褐釉がみられ畳付の一部に胎土目が見られる。

59は下半部で出土した漆器椀で内外面に赤色の漆を施す。3つの破片で上下が接合せず復元的に作図した。3/4が残る。60、61は鉄製品である。60は幅1.5、厚さ0.5cmほどが半円形を形どり、一端は破面、もう一方は不明で全形がわからない。大型の製品の一部か。61は刀子状で、残存する厚さは2mmほどで薄い。62は下半出土の細粒砂岩の砥石で器面が黄色がかる。表裏側面を使用する。63、64は礫群中の出土。阿蘇溶結凝灰岩製の石臼の上下で復元直径30cmほどでセットの可能性が高い。

5 掘立柱建物

SB070（図16） 調査区中央北よりで1間×2間の掘立柱建物を確認した。長軸は等高線に沿いN-°28-Eを取る。建物規模は桁行6m、梁行3.3mである。柱間隔は桁間でほぼ3m。柱穴は隅丸長方形で長軸は桁行の方向と同じで、長さ76cm～92cm、幅56cm～60cm、深さは50cm～60cmで桁行の底の標高が一定し地表が下がる西側が20cmほど低い。覆土は黒褐色土で黄褐色土小ブロック・粒を含む。SP027、045で柱痕跡を確認し、幅20cmほどである。柱痕跡は黄色ブロックが少なくより黒い。SP049はSK033に切られる。小ピットのいずれからも切られ、切り合い関係では検出した遺構の中で最も古い。遺物は掘方から出土しているがごくわずかで弥生土器の小片のみである。

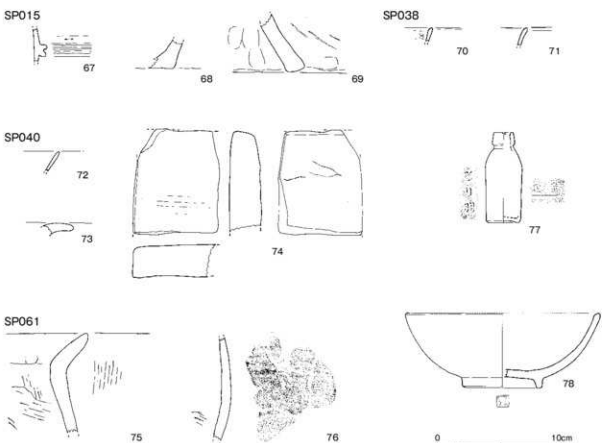


図17 ピット出土および表採遺物実測図（1/3）

出土遺物　65はSP051出土の鋤先口縁の甕で内外を横なでで灰茶色を呈す。66はSP045出土の三角突帯である。摩耗が著しいが器壁が直線的であり、甕の口縁下のものと考えられる。2片とも弥生中期である。

6　ピット出土および表採遺物（図17）

小型のピットは遺物を出土したものが44基あるが、小片2，3点の場合が多い。小片は弥生期と思われるものが目立つが、形がわかるものはほとんどない。その中で器形が分かるものを以下に示す。ただし遺構の時期を示すとは限らない。67から69はSP015出土である。67は須玖Ⅱ式の突帯部で赤色顔料が少し残る。68は弥生中期の甕の底部で器面は荒れる。69はなで調整で支脚と考えられ、径が大きい。70、71はSP038出土。70は黒色土器の口縁部片で内面に研磨が残る。71は土師器の口縁部である。72から74はSP040出土。72は土師器の口縁部で坏か。73は土師器の甕の口縁部である。74は瓦で焼きが甘く白色を呈し、全体が摩耗する。外面に叩き様の浅い平行くぼみがみられる。75、76はSP061出土。75は土師器の甕の口縁部で外面は器面が荒れ幅広の刷毛目がわずかに残り、内面は削り調整である。古代か。76は甕の胴部で外面に叩き、内面に削りと指おさえがみられる。

77，78は調査地内の採集品である。77は青い透明の瓶で「るり羽」「定量」の文字がみられる白髪染めの容器。78は青磁碗で淡い灰緑色の釉で畳付は露胎である。畳付内には四画の枠内に文字、枠に接して数字の「6」が刻まれる。

7　おわりに

弥生時代中期から現代の遺構遺物が出土した。最後に各時期について確認しておきたい。

弥生時代ではSK033、SB070が該当する可能性がある。いずれも時期を示す遺物が少なく明確ではない。周辺では5次調査で後期初頭の竪穴建物等がまとまっているが、SK033は床の形状など近いものがなく、時期の確かな類例が待たれる。SB070はSK033に切られ、検出した遺構で最も古く位置づけられる。5次調査では同じく1間×2間の掘立柱建物SB185があり、規模もほぼ同じで近い時期が想定される。SB185は小片から後期前半と考えられており、SB070の遺物が中期までに収まることと近い。麦野の丘陵に竪穴建物と掘立柱建物からなる集落が展開していたことが想定される。

古代ではSK024、SP061をあげることができる。この時期の遺構が多い地域にあって遺構、遺物ともに少ない。谷近くの台地縁辺部であることが遺構分布に出ているものだろうか。SK024は竪穴建物の可能性があり、その遺存状況からして、他にも削平されたものもあると考えられる。

近世では井戸2基以上と土坑2基を確認した。時期がわかるものはいずれも18世紀のものである。井戸ではいずれも井戸枠を確認でなかった。12次調査でも近世の土坑、井戸が確認されており、丘陵縁辺まで集落が広がっていたことが分かる。時代が離れるが、図4で竹林になっている状況は、集落の一部であった名残であろうか。

調査区北側を横断する2本の溝SD001、002は現代で、SD001出土の猪口2から昭和12年以降に位置付けられる。ただしこの地は昭和初期（図4）から宅地化される昭和40年代まで竹林等であることから、この林の中に築かれた溝ということになる。排水などの用途が一般に考えられようが、疑問も残る。

台地上の遺跡の分布、利用形態を示す資料を各時代で得ることができた。

1　調査区北半 南から

2　調査区南半 北から

3　SD001・002 西から

4　SD001・002 北東から

5　SK024 西から

6　SK024 貼床除去面 西から

7　SK033 西から

8　SK033 土層 西から

9　SK033 貼床状除去後 西から

10　SK005 南から

11　SK065 南から

12　SK068 西から

13　SK047･048土層 南西から

14　SK048土層 西から

15　SK047土層 南西から

16　SE023 南から

17　SE056礫群 西から

18　SE056礫群 西から

19　SE056 南東から

20　SE056 東から

21　SB70（南から）

22　SB070 北から

23　SK024 周辺検出時 北西から

24　調査区北半 北から

25　南半作業 南から

26　調査区北半 南から

報 告 書 抄 録

ふりがな	むぎのしーいっせき10
書　名	麦野C遺跡10
副書名	第17次調査
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1435集
編著者名	池田祐司
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2021年3月25日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
むぎのしーいっせき 麦野C遺跡17次	はかたくしちょうめ 博多区麦野6丁目15-14・15・16・18	40132	50	33.54847	130.464953	20190918～20191021	193㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
麦野C遺跡17次	集落	弥生時代、奈良時代、近世、現代	溝、竪穴建物、土坑、井戸、ピット	弥生土器、土師器、須恵器 瓦器、陶器、漆器

要約

麦野C遺跡は福岡平野を北北西に延びる丘陵上に立地し、北西側の麦野A遺跡との間には狭い谷が北東から入る。調査地点はこの谷に面した緩斜面に位置する。

20～40cmほどの攪乱土壌を除去した烏柄ローム上面が遺構面で、北西へ向かって緩やかに下がり、標高は14.7～15.4mである。検出した遺構は溝2条、土坑3基、井戸3基とピットである。覆土は主に黒褐色土または灰茶褐色土で、前者の遺構が古い傾向がある。

2条の溝は現代のもので北西へ走る。土坑のうち黒褐色土を覆土とするSK024、033からは少量ながら古代の土師器、弥生土器が出土し、この時期の可能性がある。調査区中央には長軸80cmほどの長方形のピットからなる1間×2間の建物を検出した。そのピットの一つはSK033に切られる。2基の井戸は近世で1基は深さ2m、近世後半のSE056は深さ4.4m以上におよぶ。

遺物は古代以前と考えられる黒褐色土を覆土とする遺構からの出土が特に少ない。土坑からは弥生中期の須玖式片などが出土しているが、埋土に散在する程度で時期の決め手に欠ける。近世の井戸からは肥前陶器・磁器、漆器椀、石臼などが出土している。弥生時代中期から江戸期の集落の一部と言えよう。昭和初期の地図では竹林である。

麦野Ｃ遺跡10

第17次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1435集

2021（令和3）年3月25日 発行

発行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1-8-1

印刷　エース印刷株式会社
〒810-0052　福岡市中央区大濠1-6-9